

7. コロンビアの非日常 1 その4 カーニバルと天理教祭典

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアのお祭り、特に「カーニバル」を整理しているうちに、キリスト教が支配する国々・地域で、宗教における日常性と非日常性の区別や重なった部分が見え隠れし、私の頭の中で曖昧になってきた。そこで、このような「カーニバル土壌」の中南米地域の日常と非日常を再整理しようと思う。民俗学で言う「ハレとケ」、つまり「年中行事・お祭り・儀礼と普段生活」の入れ替わりが、中南米ではどうなっているのかについて確認したい。「祈り」とカーニバル

2011年～2014年、天理教コロンビア出張所は、首都ボゴタで行われた「平和のための宗教間礼拝式 (Liturgia Interreligiosa por la Paz)」と称する諸宗教イベントに3回参加した。手元の資料をみると、カトリックが9割以上というキリスト教の国の中で、ボゴタのカトリック司教のほか、長老派教会、メノニータ教会、セブンスデー・アドベンチスト教会などのプロテスタント系の牧師、日本からも仏教系のコロンビア曹洞宗の僧侶も参加していて、総数20もの教団の代表者が集った。

最初の十数分は一緒にスペイン語で共通するオラシオン（祈り文）を唱和する。先ず主要祭司が主文を唱え、その後私たち参加祭司（諸宗教の宗教者たち）が続けてその文に基づいたお祈りの文を読むスタイルであった。その中のある部分を紹介する。

主要司祭：「私たちはあなたによって創造されたワンファミリーということ存じています。しかし、私たちは自らの高慢のゆえに、私たちと同じように（神を）信じなかつたり祈つたりしないすべての人たちを差別してきました。」

司祭一同：「それゆえ、天の父なる神よ、あなたが私たちに憐みを下さることを祈り、汝の許しを請います。」

このようなやりとりが計10回も続く。何回も「神様、許し給え」なのだ。

その後は各教会・教団で5分程の独自のパフォーマンスを行った。私たち天理教のグループは「おつとめを披露できるなら参加してもよい」という約束を主催者側に伝えていた。「よろづよ八首」を鳴り物（笛・拍子木・ちゃんぼん・すりがね・三味線）をいれて勤めた。

そして「親神様は、陽気ぐらしをさせ、神様も共に楽しむために、この世・人間を創造されました。私たちはすべて親神様の子供であり、人類は皆兄弟姉妹であります。天理教の目的は「陽気ぐらし」社会の実現にあります。この喜びに満ちあふれたぐらしを実現するために、私たちはお互いを立て合い、人助けを実行しましょう」と締め括った。自負するわけではないが、約800名の観客は総立ちとなり拍手が鳴り止まなかった。私たちも嬉しさのあまり、のぼせ上がってしまい、会場に全ての楽器と神具を忘れてしまうほどであった。

コロンビアにおけるハレとケ

この経験を通して、コロンビア人は敬虔な信者であり、彼ら自身もハレとケ、宗教における日常性と非日常性を意識することなく生活に取り入れているのだ、と感じた。

「カーニバル」は本来宗教のお祭りである。キリスト教信者にとっては、カーニバル、聖週間（イースター）、クリスマスは典型的な年に1度の「非日常性」のイベントである。カーニバルは数日間、聖週間は文字通り1週間、クリスマスは2日間（クリスマス・イブの24日と25日）だ。敬虔な信者もそうでない人たちも老若男女が皆、生活や労働とは異なる時空間で日常を逸脱し

た演技やパフォーマンスに没頭する。

一方で、毎日もしくは週1回のミサの参列は「日常性」の習慣であり、「ケ」である普段の生活の一部だろうと推察する。多くのキリスト教会では週に3回以上、朝から夕刻まで、1日に数回ミサを行っている。コロンビアではこの十数年間、プロテスタント系の宗派の教勢が伸びていて、どこのプロテスタント系の集いでも1回の礼拝に二千から三千人は集めている。

この「集客力」はどこから来るのだろうか。思うに、まず牧師の説教が上手なことだ。何百、何千という聴衆を飽きさせない。話術も達者である（内容は私はよくわからない）。そして設定が「おしゃれ」だ。ミュージックあり映像ありで、コロンビアではこのような「ケ」（日常）があり、そこで精神を安定させて、「ハレ」のカーニバルやクリスマスなどの非日常性活動によって、エネルギーを蓄え且つ発散する。そしてまた、日常へと戻って行く。そういう構造なのだろう。

天理教の場合

天理教は毎月の月次祭と毎日の礼拝（朝勤め・夕勤め）がある。毎日の礼拝は信者にとって日常の行為であり、これによって心を澄ます。それに対して、月次祭の祭典は、どちらかという「非日常性」の性格が強い。

私は、岐阜県にある教会を15、16年前に訪ねたことがある。品のある女性の会長さんが何枚か写真を見せてくれた。「これね、昔の月々の祭典の時の様子の写真なんです。たくさんのお店が出てね。人もたくさん来て、賑やかでした。」その写真には教会の境内地はもとより、周辺の道路までも屋台が並んでいた。月次祭自体が「お祭り」、すなわちハレの行事として賑やかに楽しんでいたであろう。

コロンビアのお祭り（フィエスタ）では、歌と踊りそれに伴う飲食が中心であるが、規模の大小はあっても根本部分は案外似通っていることに気づく。

コロンビア出張所のバザー

コロンビア出張所でも、祭典として月次祭を行うが、参拝の人々のほとんどは信者であり、その家族・友人などが付き添ってこられているくらいで、非日常生活を楽しみに来ているとは言えないだろう。

その代わりに、年に1度「大ビンゴバザー」を行う。その名の通りビンゴゲームとフードバザーをメインとして、その売上げを施設に寄付するという目的があるのだが、このイベントには多く（約800名）の人たちが来所する。

来る訪問者も非日常で楽しむ目的があるだろうが、準備する側や付き添う側の信者にとってもこのイベントがハレである。バザーが終わると皆くたくたになって疲労困憊するが、達成感は大いにある。何カ月も前からの準備、当日の作業など、みな一つの目標に向かって作業をする中で、新たに始まる日常生活への糧になっているのである。



【2023年11月26日 天理教コロンビア出張所大ビンゴバザー】